

藤岡換太郎著 『川はどうしてできるのか』

佐藤博明*

Hiroaki SATO*

雑誌「火山」にこの本の書評を書かないか、とお誘い頂いた時に、火山と川では主題として遠いのでは、と一瞬思った。しかし、一読して、火山研究者にも有用な内容が多いと考え筆をとらせて頂く。川を流体の重力による地表面上の流れ、と広くとると溶岩流もその一部に含まれる。実際 p.96-100 ではキラウエアを例に溶岩流の記述がなされている。ただ、月のリルのような熱浸食についての紹介は省かれている。著者も書いているように当初の原稿の学術的な部分は大幅に削られ、より一般に親しめる内容が残されたようなのでやむを得ない。

全体は3部に分けられ、第1部では「川をめぐる13の謎」が記されている。謎の9「源流がない川」では富士山麓の柿田川が取り上げられ、伏流水の説明がある。火山地下の水の流れは火山学にとっても重要だ。謎の12「海底を流れる川」では海底谷について色々な話題が取り上げられている。火山噴出物が海底重力流として谷を刻む可能性等、まだ検討されていない問題も見出すことができる。謎の13「地球の外を流れる川」では火星の河川の話や、土星の衛星タイタンで見られたメタンやエタンの流れによる河川地形がナイル川のそれに類似することが記されている。

第2部「川をくだってみよう」では、多摩川を例にして、川の源流から時間を追って、上流の風景、中流の風景、下流の風景が紹介されている。著者のうんちくが諸処に織り込まれており一気に読むことができる。溶岩流や火砕流でもこのような視点で記載していくのも一つのやり方のように思った。

第3部「川についての私の仮説」では、仮説の1「天竜川の源流はロシアにあった？」で天竜川の始まりが諏訪湖にある現在の姿についての疑問を投げかけ、過去の状態についての推論を行っている。著者は既にブルーバックスに『山はどうして出来るのか』、『海はどうして出来たのか』を上梓しており、この『川はどうして出来るのか』を合わせて三部作となる。川は最も生活に身近な存在であるが、逆に科学の対象としては多様な側面がある。巻末には自然地理学や河川工学等の専門書や、河川を主題とした広い範囲の書籍が60数冊あげられている。この本は、著者の理学から文学までに渡る広い視野で書かれた独特な本であり、容易に読むことができるので火山学分野の若手にもお勧めしたい。

(講談社、2014年10月20日刊、216頁、860円(本体価格)、ISBN 978-4-06-257885-1)

* 〒651-2277 神戸市西区美賀多台 6-3-1-2-104
Mikatadai 6-3-1-2-104, Nishi-ku, Kobe, 651-2277, Japan.
e-mail: hsato47@gmail.com